

都市の緑
3表彰緑がつなぐ
町・人・暮らし

一般財団法人第一生命財団では、公益財団法人都市緑化機構と共に、「緑の環境プラン大賞」(共催)、「緑の都市賞」「緑化技術コンクール」(いずれも特別協賛)の、「都市の緑3表彰」に取り組んでいる。これらは、都市緑化を通じ、環境保全、ヒートアイランドの抑制、二酸化炭素の削減、緑のまちづくりや植栽活動を通じたコミュニティの形成などに貢献する事業を支援、顕彰するもので、全国各地で、すでに多くの取り組みが実績をあげている。これらに選出された事業のなかから、とくに都市環境の向上やまちづくりに資する事例を取材し、緑を通じたまちづくりを紹介していく。

取材・文:佐藤真 photo:坂本政十賜



「つどいの森」に設置された木製のベンチ。玄関から奥へ向かって緩やかに起伏が続く



近隣の桜川公園や桜川敬老館などの緑化空間をつなぐグリーンベルトの中核施設として計画された

[第23回]

緑化技術コンクール
国土交通大臣賞:緑化施設部門

本の森ちゅうおう (中央区立京橋図書館・中央区立郷土資料館)

東京都中央区



本の森ちゅうおうの外観。人工地盤上の「つどいの森」から各階の読書テラス、屋上までを緑化した

「共に創る森」がテーマ

「本の森ちゅうおう」は、中央区の京橋図書館・郷土資料館・多目的ホール・カフェなどからなる複合施設である。東京都が所有していた京橋図書館を解体し、中央区が中央区新富に新たに購入した土地に「本の森ちゅうおう」をつくった。新しい公共施設をつくるにあたって何かいいコンセプトがないかと考えていた時に「森」というテーマが出てきたという。

「中央区が掲げる公共施設群を緑でつなぐビジョンに共鳴し、大都市東京の真ん中で歴史・文化に親しみながら、訪れる人々が共につくり育てていく森のような場所になることを目指した」と語るのは、類設計室計画設計部部長の佐藤賢志さんだ。

「この場所に公共の施設をつくるという企画は、20年以上前からあったようで、近くに公園や隅田川もありますから、緑豊かな場所をグリーンベルトがつなぐような都会のオアシス的なイメージがあり、それが森というテーマに引き継がれたのでしょう。大都市のなかに生まれた緑豊かな自然という感じでしょうか。

図書館に行くと探している本となかなか出会えなくて、本棚のなかで迷ってしまうようなことがあるのですが、その状態がちょうど深い森のなかに入つていて彷徨ってしまう経験と重なるところがありました。それもあって、森と図書館というのはなんとなく似ているなと思いました。森のなかでの自然や生き物たちとの偶発的な出会いと図書館のなかでのいろいろな本との出会いは、案外近い関係にあるんじゃないかな。図書館を設計するにあたって、この似た関係を活かしたいと思いました」

森林生態系の摂理に範を求める

設計するにあたり、森林生態系の摂理に範を求めたという。どういうことかというと、建築内外のさまざまな場所と機能が融合し、自然の光や風と一体となり、緩やかに秩序化される様相をデザインしたいと考えたからである。実際設計するにあたってさまざまな制約条件があったという。なかでも一番大きかったのは、北側に地下構造物(下水暗渠)があったこと。さらに東側には地下鉄も通っていた。図書館というのは平屋が多い。それはなぜかといえば、利用者にとってはその方が本が見やすくて探しやすいから。サービス側からいえば、整理しやすいというメリットがある。それに加えて、最近では「居場所」としての図書館という面もあり、要するに心地よく過ごせる場所であることも求められている。

「ここは中央区の中央図書館なので蔵書数が非常に多い。開架に出てる本だけでも20万冊、出でない本も併せると40万冊あります。そこで、書架と蔵書についても森の階層構造を模して、分類配架しました。1階は、エントランスホール、多目的ホールなど、2階は、子どもの本、郷土資料、地域資料など、3、4、5階は、



「つどいの森」には、さまざまな樹木が配置され、散策路を巡りながら楽しむことができる



「つどいの森」に面した閲覧室は、緑を近くに感じることができるように設計された



東側に大きく張り出した読書テラス。椅子にもボロノイ図形が施されている



図書館の天井は自然界に見られるボロノイ図形に従ってデザインされている

一般書を中心に専門性の高い書籍を配架しました。森の階層構造でいえば、1階は林床、草本層、2階は低木層、3階は亜高木層、4階は亜高木層と高木層、5階は高木層にあたります。また、各階共に窓際に近い方は書棚を少し低めにし、光を取り込みやすくしました。そういうふうに、設計・施工的には面倒にはなるんですが、居場所として快適になる工夫を随所に施しました」と佐藤さんは語る。

「本の森ちゅうおう」には、450席の読書席が確保されているが、それだけの数を収容しようとするとこの敷地面積では難しい。それもあって5階建(屋上を入れると6階)にしたという。しかし、利用者側からみれば、高層化はわかりにくく使いづらい。

「それを少しでも解消できないかといろいろ工夫をしました。たとえば、各階の床の色を変えてあります。利用者にとっては、今どの階にいるのか、どの書棚の前にいるかが、直感的にわかるようになっています。つまり、自分の探している本のある場所に、ほとんど意識することなくたどり着けるというわけです。私たちは、森林生態系の摂理を範とするという言い方をしました。図書館での振る舞いと森林生態系の摂理を重ね合わせ

ることで、建築設計と緑化計画を同時に進めることができたのです。

先ほど言いましたが建物の各階を森林の階層構造になぞらえてデザインしました。各階の空間の疎密感や色、明るさなど、テーマを設けてわかりやすくしました。低層階は、森林でいえば林床、草本層、低木層にあたり、上層階に行くに従い亜高木層、高木層を模して色や明るさ、素材を変えています」

光あふれる読書空間の創出

自然界にはボロノイ図形があることが知られている。植物の葉の葉脈やとんぼの羽がそれだが、不定形な形が連続する場合に見出せる法則性で、ここでは、床や天井、あるいはベンチなどはボロノイ図形に従ったデザインが施されている。人工的な円や四角ではなく、ボロノイ図形を用いることで、より自然界に近い環境になっているという。

「ここは東西に細長く広がった土地に建てられていますが、ボロノイ図形を用いることで、利用者を空間の奥へ奥へと誘います。図書館を含めて公共建築にはサインがとても多い。それも空間の人工性を利用者に強く意識させる要因の一つだと思っていますが、ここはむしろそうしたものより自然性を感じることができる空間にしたいと思い、サイン類もそうした工夫を施してあります」と佐藤さん。

「図書館というのは直射日光が一番の敵で、それを浴び続けると本は焼けちゃうんですね。ところが、ここは北側に下水暗渠があったため、その暗渠を避けるために建物をセットバックさせて、広い緑地空間をつくり出し、直射日光を避けることができたんです。普通、図

書館というとなんとなく暗いというイメージがありますが、ご覧のように全面ガラス張りの明るい空間になっています。自然光が室内空間いっぱいに広がる図書館というのは、おそらく世界にもそう多くはないと思います。北側に暗渠があるという条件を逆手にとった設計でした。あと道路側が東になるんですが、朝から屋過ぎまで光がすごく入ってくるので、思い切って窓から張り出るように読書テラスを各階につくりました。自然光の下で本が読めるというのは、それだけで嬉しいですよね。また、テラスには蛇籠プランターを用いることで、室内外からの緑視率を高めています」

2階人工地盤上の約80mの「つどいの森」は、植物が生い茂っているような印象を与える。また、窓際の読書テラスにも蛇籠プランターを並べたので、図書館全体が緑に覆われたようなイメージを醸し出している。

「それぞれの庭には四季折々の植物が楽しめるようにといろいろな植物を植えました。コンセプトが〈共に創る森〉ですから、まさに植物も利用者も共に育ち育てら



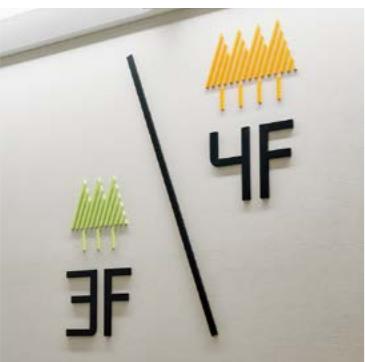
本の森ちゅうおうのスタッフ。左から二人目が類設計室計画設計部部長佐藤賢志さん

れていく場所になっていると思います」

自然の森に範を得た「本の森」が、人々が交流しまさな情報を感じし発信していく「知の森」になっていくことを期待したい。

【参考文献】『新建築』2023年1月号、本の森ちゅうおう p164-171

書架は東京都西多摩郡檜原村の木材が使用された



フロアごとに色分けされたサイン

